

2月7日 感受性

娘が小さかった頃、よく絵本の読み聞かせをした。娘は2人とも「大きなかぶ」が大好きだった。「うんとこしょ、どっこいしょ」のリズムの良さ。そして、犬や猫、小さなネズミまでもがおじいさんの手伝いをする。その絵面がなんともユーモラスで、何度読み聞かせしても、子ども達はケラケラ笑いころげるのだった。

昔、ある教育雑誌でこんな話を読んだ。小学生を自然学校に引率したとき、1人集団になじめない女の子がいた。担当の先生が心配になって、夕暮れ時に小高い丘に誘い出し、悩みを聞くことにした。沈みゆく夕日を眺めながら、「きれいだね。心が落ち着くね」と話しかけると、少女は「えっ、ただ日が沈んでるだけじゃん」と言ってスタスタ1人で帰って行った。

ものを見たり感じたりして心揺さぶられる力を「感受性」という。沈みゆく夕日を見たときになんとなくおセンチになるのは、夕日の美しさとそのはかなさが、矢のように去る時間の切なさや「終わる」ことに対する空しさと重なるからではないだろうか。

何の努力もせず、何も考えず、何も感じずに時を過ごしている人間の瞳には「沈んでいるだけ」にしか映らないのかもしれない。

大人になってもうちの娘らは「ケラケラ」笑う。何も感じられない薄っぺらな人生より、泣いたり笑ったりの厚みある人生の方が楽しいに違いない。茨木のり子さんも言っているではないか。「自分の感受性くらい 自分で守れ ばかものよ」

